

* 日本精神文化の根底にあるもの 二

— 実存的不安と託宣 —

キーワード…

実存・託宣・不安・神懸り・審神者・近代

一 はじめに

この数年のニュースを見ているだけでもわが国内は問題続出である。政治家や官僚層の腐敗墮落、警察官の不祥事、医療ミスの多発、大手発電所の事故隠蔽、食品会社の牛肉偽装装等など、列挙したら限りがないほどである。特に問題なのは、社会の模範として、組織運営に当たるべき人々の責任感の希薄化が浮かび上がってきていることである。

人の模範となるべき教育者や裁判官・弁護士等の法曹関係者の犯罪が日常茶飯事として発生し、人々がもはや当たり前であるかのごとくに受け入れられるようになっていく。ごく普通の家庭においても、子や孫が親や祖父・祖母にごく些細なことでも平然と手をかけるといった、かつてない事件が最近が目立って頻発しており、かくまでに人心の荒廃が進むとはいったい誰が予想したであろうか。今日の深刻な事態を私たちは一体どのように受け止め、どこに根本的原因があるのかを明らかにし、且つ解決の道をどう探っていくたらよいか、真剣に問い直すべき時期が来ていると思う。本論では、日本文化研究者としての立場から、この問題について、文化の根底にあるものへの洞察をおして、考察してみたいと思っている。

二 実存的不安について

明治以降、わが国は「近代化」を図るために、欧米列強に追いつき追い越せとばかりに西洋科学合理主義、唯物主義、経済効率第一主義を優先させる政策を採ってきた。精神生活を支える支柱たる学問ですら、それまで

** 渡 辺 勝 義

の基礎学であった縦文字(国学や四書五経)から横文字に切り替えてしまうなど、夢中になって西洋物質文明の模倣に次ぐ模倣を重ね、心や文化の大切さを軽視するようになってしまった。第二次大戦後はより一層この傾向に拍車がかかったと言えよう。何よりも模倣の対象がアメリカ合衆国となり、小判鮫よろしくそのおこぼれを頂戴して、なりふり構わず経済的豊かさのみを求めた結果、外見上は世界第二位の経済大国にまで発展してきたかに見える。

しかしながら、ふと気がついてみると、日本人は神霊的なるもの(意識的表象としては「神」「仏」にあたる)や、己が生命の源(親・先祖の御霊)への畏敬と感謝の心を喪失してしまい、生き物としての生命の根源たる鎮守の杜(母なる大地であるとともに、神霊の御住処でもある)を忘れるに至ってしまった。その結果、講や氏子組織といった古来の日本のコミュニティ・ネットワークが失われ、従来の地域連帯の強い絆はズタズタに切り裂かれてしまっている。新たに登場した市場的商品経済の洪水のなかで、各人はもはや個人というよりは、単に物質化した個々の断片に過ぎなくなっており、人間としての尊厳の一番根幹にある「霊的生命性」を見失っている。

この「霊的生命性」とは、いわば「原初的心の在処」とでもいうべき状態で、新たな福祉国家のあり方を模索しているウエルフェア・リベラリズムの提唱者の一人、ロールズらが「原初的契約」と呼んでいるところのものに類比されよう。(注1) それは経験知を超えた、生き物としての直感的な利他的公共心を指しており、

* Received Jan 8, 2003

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 福祉コミュニティ学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

本来教育されずとも、万人に備わっているという。これなくしては眞の倫理的道德心などあり得ない、とロウルズは考えている。私はこの「原初的契約」などよりも一層根元的な存在として、「靈的生命性」という考え方を提唱したい。それは人間を個人と捉えず、また単に人間のみの関係を越えた自然のなかの存在として位置づける世界観である。生きることにそのことが道德そのものである、そういったあり方が「靈的生命性」であるといえよう。日本が採用してきた近代物質主義的教育は、それを抑圧してしまひ、市場競争に勝つことだけしか眼中にない大量の「市民」を生み出している。挙句は、日本国中どこでも、自分さえ良ければ他人のことなどどうでもよい……といった「吾れよし」のエゴイステイックな人間ばかりになってしまっている、といえよう。

黒船の来航以来、それまで何事も神意を第一とした日本人が、圧倒的な物質力を西洋に見てしまつてからというものの、欧米列強に追いつき追い越せをモットーにして、恐るべき勢いで物質主義的科学教育（文明開化教育）が学校教育を通して世間一般に浸透していくなかで、日本社会はそれまでの過去の生き方とすっかり断絶してしまつた。それは、存在への関わりといった人間の生の本質に関わる問題から日本人の目を背けさせ、また、より根本的視座としては、いわゆる《神靈》から目を背けさせてしまつて、狭い近代人的《現象世界》に人々を埋没させて、ただ起きて食べて働いて帰って寝る……といったルーティン化されてしまつた日々の人々を潰け込んでいる。その結果、限りなく鈍感になつた我々は、誰もが何ら不安を感じることなく生活している、といった状況に埋没してしまつている。

一般的に現代人は、本来《叡智》（知恵ではない）があれば行き当たらざるをえない《実存的不安》の問題から目を背けて、利那的な現世合理主義に縋つて、ともかく生活して行けばよい……といった、まさにハイデッガーが『存在と時間』の中で指摘している、あの最も大きな精神的《墮落》の極にあると言えよう。（注2）

ここで言う《実存的不安》とは、世間一般に言うところの日々の生活不安とか、日常の瑣末な心配事という意味では全くない。それは、言ってみれば、人の御都合主義的なはからいに世界が納まらなはれないという眞実を身に沁みて知ること、人間の理性や合理的なものが無力であるというこ

と、そして、実は誰もが心の底に怯えとして持っているもの、を言う。それは「悪夢」とか、何らかの「予感」とか、「胸騒ぎ」とか、何やら「得体の知れない恐怖感」とか、そういう形で瞬間チラッと姿をかいま見せる。そのとき、「普通の人々」はあわててキョロキョロ周りを見渡して、それらが無いかのごとく振る舞っている自分と同じ人を発見し、まるで何事も無かつたかのごとくにしてしまふ。しかし、目に入ったゴミや喉仏に刺さつた骨のように、僅かな存在だけで決定的な痛みを与える、そういった存在が《実存的不安》である。

「死」というものはその象徴的な存在である。もちろん死そのものは実存でもなんでもない。しかし、死への人の態度は、実存への態度と類比的構造を持っている。普通の人は、死というものは必ず誰にでもあると思う予感を持っているが、とりあえず無いことにして日々生きていく。この態度こそが実存問題を見えなくさせている根源である。逆に言えばこれが実は大いなる精神的墮落である、ということまで自覚できるかが眞実に至る道なのである。（本当は自分は何者なのか）ということをもつたく問わなくても何とか生きていけるために、人間のご都合主義の計らいに決して世界がおさまってはいない……という眞実を身に沁みて知ることもない。

神と自己との本質的關係を眞摯に問いつめ、「実存的不安」を哲学的思考の根幹に据えた宗教者キエルケゴールは、この問題を『死に至る病』を通して、我々に問いかけた。その冒頭で、彼は、ナザレのキリストの奇跡譚の一つラザロの物語を採りあげている。キエルケゴールは、最も愛した弟子ラザロが悪しき病に倒れて死んだ、と人々が思いこんでいるのを否定して、キリストはラザロの不死を証した、という事跡を描くことで、神の實在を我々に語りかけている。キエルケゴールが見逃さないのは、このとき人々（彼は近代合理主義の淵源をここに見ている）がこの奇跡をうけられることができず、キリストに殺意を抱いた、という一節である。（注3）

現世合理主義に毒された人々は、存在の証される場に向き合いたくないのであり、それを突きつけるものに対しては、殺意すら抱くという。結局近代人は自分のご都合次第では、神すら亡きものとして平気なのである。ニーチェは「神は死んだ」という有名な言葉を残したが、『ツァラトゥストラ』のなかで彼が皮肉を込めてそう言ったのは、実は古くはヘレニズム時

代にさかのぼることのできる昔から、ヨーロッパでは物質主義的合理主義がヨーロッパ人の心を蝕み、神を殺してしまった、と言いたかったのである。

我々が心せねばならないのは、人間の作っているちっちゃな本質論、つまり単に自分のご都合に合わせた《合理的》世界解釈というものが見事に打ち砕かれたときに「実存」が開示されるということである。人ははじめて「不安」を目の前に突きつけられて自己存在の無意味（虚無）さについて考えはじめ、人間の合理や理性などといったものが如何に無力なものであるかということを知るのである。この時、人間としての正しいあり方は、キエルケゴールの言え、人間がただ神靈に素直に向かうということではなく、何よりも物質主義に毒された自我意識を捨てて実存の開示に立ち会おう、という真摯な生き方を選ぶところにある。神靈の大いなるはからいも、大いなる真理の顕現もここから出発しなければならぬのではないだろうか。

三 「不安」に立ち向かう道

「近代」という世界の在り方の最大の欠陥は、地球規模で、——近代日本の場合は《国民》の規模で——人々を《実存的不安》から逃亡させたことである。人々は「死」など無いかのごとく、そして何よりも「神靈」など無いかのごとく、ただ視覚像、聴覚像、味覚像、臭覚像……といった感覚的与件のみで閉じた小さな世界を作って、その中に身を置いて「幸せなわたし」という気分浸って一日一日を無為に過ごしている。そういう生活を可能にしたのが残念ながら「近代」なのである。これを大いなる墮落と言う。心の奥底で不安に怯え、しかもそれが無いかのごとく誤魔化して立ち向かおうとしない。従って実は逆に不安に無意識に支配されて、いつまでも人生の意味を問うことができなくなっている。この不安を克服することこそ、意味ある人生を生きたるために最も大切なことなのである。

では、この「不安」を私たちは如何に克服し得るのであるか。それは不安からいかに脱却し逃げるか……ではなく、これを正面に見据えて立ち向かうことである。不安に立ち向かうとは、神靈や死といった問題を真摯に見つめ直す勇気を持つということである。それは人間という現象存在のもの

つ根本的な欠落をとことん追い詰めることであり、自分の生きて来た墮落した世界を根底から揺すぶることになるのだ。

これは畏るべき恐怖に曝されることを意味する。それは自分の死を目前にしたものの恐怖と同じ構造を持っている。人はなぜ死を恐れるのか……、痛いからか、苦しいからか、寂しいからか……愚かな人はそういったものを原因として挙げるであろう。しかし、本質は違う。自分の存在自体が無意味になることへの恐怖感なのである。自分が生を得る前にすでに無限に時間があり、生を失った後にも無限に時間があつて、この無限の時間に飲み込まれてしまった時、すべては無意味になってしまう。この「無意味」というあり方こそ、人が最も逃げ出したくなるものである。意味のない生。家族との楽しい団欒も、友人との熱き交流も、仕事を達成した歓びも、みな無意味化してしまう……それを人は予感して目を背けるのだ。

「近代」という意識のあり方は、この恐怖感に耐え切れず、人間たちが集団で逃げを図ったはかない存在にすぎない。それは、精神（魂：プシケー）という宝をせっかく与えられているのに、それをまったく使わずに、最初から敗北して目を背け、うつむいて短い一生という時間を、人間の精神のまったく存在しない虫けらと同じ生き方を選ばされてしまっている「近代人」に特有の生き方なのだ。否、人間の精神を持っているが故に、悲劇の根は深いのである。しかし人はこの恐怖から逃げようにも、実は逃げられない。従って、人々は「近代」という枠の中で、その時そのときの感覚的刺激のみに必死になって頼るようになり、より忙しげに振る舞うことになって、挙げ句は愚かな人生を無為に過ごしてしまうことになる。真の人間は勇気を持ってこの「無意味」という世界のあり方に立ち向かわなければならぬ。それは当然のことながら個々の人間という有限の存在をはるかに超えた大いなる出発である。「神靈」への真摯なる呼びかけ、これはこの精神的な限界の自覚に基づくものでなければならぬ。「虚無」から目をそらしている限り、墮落した精神状況はどこまでも続くことになる。

《人は何故、精神を病むのか》

不幸にして「近代」という世界の限界にぶつかってしまった、それを支えきれなくなるといふ精神状況が存在する。その時、人はそれから逃れる

ために、唐突に自分の存在の意味を確認しようとして絶望的なあがきをずるようになる。包丁で自傷行為に及んだり、あるいは不特定多数の人を傷付けたり、奇矯な声を張り上げて暴れまわり、また何日も寝ないで一点をジッと見つめてみたり、何者かの声にジッと聞き耳をたてたりと、その行動は人さまざまである。周りの人はこういう状態に陥っている人を「発狂した」と呼ぶ。

しかし、厳密には、彼らは何らかのあり方で開示されようとしている実存的恐怖に気づき、それ故にそれに耐えかねて、必死に逃げようとしているのだ。そういった意味で、実は彼らは「発狂している」と述べている周りの《正常な》人間達よりもはるかに優れた面を持っているのだが、しかし不幸にして彼らは己れの限界には気付いたが、それを克服する術を知らず、また何よりも、克服すべき道をわきまえている優れた「師」を持たない。落ち着く先は「近代」の申し子である医者という合理主義的知性の持ち主にはか出会うことが出来ず、その結果は言わずとも明白である。絶望的な行動を繰り返した挙句、しまいには完全に精神活動を停止させ、生きながら精神的死の世界に閉じこもってしまう。こうやって、一人の廃人が生み出される。廃人にならなければ、自らの命を絶つという盲挙に出ることになる。不思議なことに、そのような形で追詰められた人間たちは、まことの神霊ではなく、妖精・邪霊（魔物）に出会ってしまうのであり（これからお話しする某女性の例に典型的なごとく、「悪魔が私に指図・命令する…」という表現に、その本質が現れている）、これを近代医学は絶対に救うことは出来ない。それはまったく違う力によってしか救うことは出来ないのである。

近代医学は「狂う」ことも、個の問題として処理してしまう。サイコセラピストはこの現象を当人のみの心の病だとしてカウンセリングなどを施すが、実はその効果には自信がないので、結局は個人個人の脳の反応だと解釈して、ただ単に薬の投与に終始してしまい、本当の病人にしてしまうのであり、根本的な救いには手も足も出ない状況なのである。

へある若い女性の場合へ

以下、実際の話の内容はかなり複雑なのであるが、かいつまんでその要

点のみを誤解を恐れずに記しておく。

年来の「鎮魂祭の研究」が一段落した数年前のある日、いつものように「行法修行」を行っていた私は、一日続けて同じ霊的現象をありありと見せられる体験をした。その時私は広い大きな墓地の周囲を、まるで鳥にでもなったかのように、かなりのスピードでスウーッと飛んでおり、無数の立ち並ぶ墓石を見下ろしていた。正確に言えば神霊の導きで見せられていたといふべきである。勿論私の意識はしっかりと覚醒していた。時間的には瞬時のことであった。行法修行を積み重ねれば体得できることであるが、このような現象は、御神霊からの大切なメッセージなのであり、その瞬間に御神霊のお指図というかその意図するところを己が魂に誤りなくキャッチしなければならぬのである。あの当時私は学位論文をまとめるべく研究生活に明け暮れていた。それは、神霊の存在を、学問を通してロゴスで捉えるための修行であったと思っている。無事に博士号をとった後、本来の私の修行にもどらなければ、と思っていた矢先のことであった。その時神霊が私に「早く本業に復すべし」と語られてきたのだ、と直感した。常日頃、行を欠かしたことの無い私だが、さらに気を引き締めて修行に集中し、その予告の真意を待っていた矢先に、日ならずして某知人の二十二・三才の娘さんが自殺未遂を起こしたので、何とかしてほしいとの相談があったのである。

早速その娘さんに会ってみると、状態はかなり悪くなっており、かたくなに周囲を拒絶して、当初は私にも決して彼女の身に起こっている変化について固く口を閉ざして話してくれなかった。身辺に起こる異常について、これまでも親や周囲に彼女なりに色々訴えかけ、救済のメッセージを送ってきたが、全く理解してもらえなかったのである。私は「これこれこうして聞こえてくるでしょう？○○でしよう？」と本人の身に起こる現象について説明してゆくと、やっと分かってくれる人が見つかった、とばかりにポツポツと話し出した。

その若い女性の話によると、他人と話すときと全く同じように、耳元に複数の人の声（悪霊の声）が聞こえてきて、例えば「今、ここから直ぐ飛び降りないと、お前の親や家族が大変なことになるぞ」と言った調子で、「声なき声」にさんざんに脅されているという。彼女は親を始め周囲のも

のから「その声に聞き入ってはならない」と何度注意されても、これらの言葉よりもこの「声なき声」の方をジッと聞き入ってしまうのであった。親たちの話を総合すると、彼女は夜になっても全く寝ずに、目は益々ランランとして天井のある一点を見つめていたり、かと思つて「今、家の前に赤い車が私を迎えにきたから、行かなくてはならない」などと支離滅裂なことを口走っては、実際にはそんな車などないのに、制止しようとする親の手を振り切つて外に飛び出そうとした、という。やがて親に手を上げたりのようになり、結局は「自分が死ななければ周りが幸せになれない」などといつて自殺する恐れがためたために、病院に入院させることになつたのである。

彼女が書いた支離滅裂な内容のメモ類に目を通した精神科の医者は、この症状を「重い分裂病」と判断し、母親に「ハッキリ言つて娘さんの完治は難しく、また例え一時的に治つても繰り返す恐れがあり、一生薬を飲まなければならない」と告げた。その時の親の嘆きは計り知れぬものがあること、これまた言うまでもない。

私は、先の行法修行中の体験から、この件に関して絶対の確信があつた。病院から出た帰り道で私は「心配要りません。必ず直ります」とハッキリ親に明言した。予想していたとおり、その家族は昔の墓場の上に家を建てて長いこと住んでいた。こうした現象の主たる原因は、墓所という聖なる領域の持つ危険な力（「土地の穢れ」とか「魄霊の障り」などと呼ばれてきた）に起因している。古来、日本人はその力を充分に知っており、それを畏れて丁重に鎮め和（やわ）する祭りを行ってきたのだが、近代になつて合理主義に毒され、平気でその聖域を土地造成する、といった愚行を行うようになってしまった。この家族の家はまさにそのような造成地の上に建てられていたのである。この家族はこれまでも相当な災いを受けてきたのであるが、まさかそれがこういった原因によるものだと、考え及びもしなかつたのだ。

そもそもこのような土地に住むようになるのも、結局はこの家族が物質主義的合理主義に毒されてきたからであり、従つて「死者からのまなざし」に無知で、人智を超えた存在の神秘、いわば「死者の御霊」など全く信ずることができずに今日まで生きてきたのであつた。彼らの生活態度の中に

は、親・祖先の御霊（みたま）への感謝の心や常日頃の真心を込めた慰霊・供養といった古来の日本人だったら当然の生活態度を失つてしまつていた。それがいかに危険な立場に自分たちを置くかが判らず、結果はただしき神霊の守護を得られなくしているのだ。この家族の親祖先の御霊が「無縁仏」という最悪の状態になつていたのは言うまでもない。こういった家族に対して、存在のあり方、具体的には神霊の存在や死後の靈魂の持続などといった靈的知識について一から教へ導いてゆくことは、大変苦勞のいることなのである。まず第一にその土地を引っ越させ、私自身その親とともに真剣な行を開始した。

何故当人のその娘ではなく、何よりも親に行をさせるかというところ、この悲劇の根本原因が、親たちの誤つた家觀念にあるからである。彼らは、現在目の前に感覚出来ている個々の人間関係だけを生命ある実在と錯覚し、チリ一つまで世界が生命に満ちていること、なによりも祖先の御霊を含め、自分の住む土地にかつて生を得ていた諸々の無縁の霊が実在していることが判っていない。私はその大いなる世界関係を「スピリチュアル・コミュニケーション・ネットワーク」と呼んでみたい。近代教育はこの大いなるネットワークを完全に無視してきたので、この家族がそのことに無知だったのはいたしかたがない。しかし冷静になつて考えてみたら判らるであろう。これらの生命ネットワークが関わりを持ちたがっているのは、近代教育しか知らず、近代的自我意識に囚われて愚かな人生を送っている「親たち」の側なのである。彼らへの痛切なメッセージとして、いわば死者を含めた大いなる世界生命は、己が子の異常な姿を通して、「正しい生き方」への復帰を促しているのだ。異常さを示している子供の側だけを捉え、治療を施して正常にしようとしている現在の個人主義的治療法が、いかに的はずれな行為であるのかは、明白である。正しい治療の方向は、子供（当人）よりも親（周囲）へ、そして地域全体へと向けられなくてはならない。祖先の御霊への供養、無縁の御霊への供養、土地の御霊への供養、そう言ったことが実は大変大切なのである。まず親の側の生活態度の建て直し、私はこのことから着手したのであつた。

仕事が終わつて帰宅してからまず拙宅神前での祓い清めの行を一通り終えると、こんどは病人から払拭し、引き離した死者の霊を救い上げるため

に深夜お山での水行などに入り、下山するのは明け方近く……という日々が続いた(ただ単に「被い除く」だけでは真の救いにはならないのである)。期ならずして、当の娘さんはみるみる回復し、病院から出た後も親子共々続けて行をさせた。勿論、その間病院からの薬は一切飲ませなかった。この薬が強い麻酔性を持った大変な劇薬で、身体に大変な負担を掛け、長く常用すると本当の病人になってしまふからである。薬に依存しない生き方を身に付けさせること、このことも大切なことではあるまいか。入院時は鉄格子の中に入るほどの重い病だった彼女が二年後にはスッカリ完治し、その後なんとめでたく結婚して現在幸せに暮らしている。今では夢のような話である(もっとも、家族が行を通して折角身につけた神仏や祖霊たちへの尊い信心の心、そして何よりも世界への感謝の祈りを失わない限り……という条件付きがあり、それを忘れて元に戻ればどうなるかは言うまでもない)。

近代医療にのみ頼っていたら、彼女も家族も今頃は一体どうなっていたことであろうか。

もっとも、こうした重い障害(靈的トラウマとでも呼ぼう)を持つ人を救済する道は誰にでも出来るというものでは決してない。私の体験から、真に神靈に通ずる者、あるいはそういう役目を背負われ修行を積んできた者でなければ、逆に悲惨な目に遭う危険性を孕んでいる、ということをおかねばならないだろう。安易な治療を売り物にしているいわゆる《靈能者》に頼るなど危険きわまりない。

人はすべてをあるがままに受け入れ、神のはからいに一切を任せる生き方が出来るようになったなら、即ち「実存」ということを真に自覚して生きられるようになったら、目の前のさまざまな現象界の出来事というものに対して人間思案をしてあれこれ悩まなくなるものであるが、これまた言うは易く……である。

四 「近代」が忘れ去ったもの

国際化が叫ばれて久しいが、自国の「日本文化」をいかにして正確にとらえるかということは私たちにとって非常に大切な問題のひとつである。自文化の正しい理解なくして異文化理解は決してないからである。

明治以降、或いは昭和以降に限ってみてもどれだけ多くの日本人が海外に出たであろうか、そして現地の人々から日本文化について尋ねられる毎に、日本人はどれほどその本質について正確に語り得たであろうか。日本文化といえば、やれ歌舞伎だ、芸者だ、生け花だ、茶道だ、武士道だ、腹切りだ……などと言ってお茶を濁して、その根底に滔々と流れる精神文化については誰一人まったく触れ得なかったのではなかったか。

従来、わが国の文化を語る時にその《特殊性》や《異質性》ばかりが強調されて語られてきたきらいがあったが、日本文化は決して特殊でもユニークなものでもなく、むしろある意味で、最も《普遍的》なものであると言える。変で異質なのはむしろ「近代そのもの」なのであり、日本の精神文化の基底にあるものは、異質というよりは、むしろ人類共通の普遍的な人間の生き方・価値観なのだとも言えるのである。

たとえば「モノ」について考えてみよう。

大和言葉の「モノ」は単に物質の「物体」ではなく、「物の怪」の「モノ」の例あるごとくそれは靈的存在を表すことばであり、カミ・タマ・オニ・ヒ・チ……なども然りである。古来、日本人にとっては「モノ皆生命あり」で、そこにいのちの息吹を感じ取っていたのである。

例えば民間では今でも「針供養」が行われる。使い古しの日本針や習字の筆などは、近代的合理主義者が見れば、それはただ捨て去るだけの単なるゴミにしかすぎない「物体」であるが、私たち日本人はそれを神前或いは仏前に供え、それに対して感謝の心を忘れることはなく、慰霊・供養を怠らない民族だったのである。今でも単にガラスとゴムと金属とで出来た物にしか過ぎない「車」にさえもお祓いをする慣行が僅かながら残っている。近代的合理主義者には単に物にしか過ぎない木であっても、日本人にとっては樹齢数百年を超える樹木はそれを他の木々とは聖別し「ご神木」として注連縄を張り巡らしてきた。そこには、「木霊」(こだま)と言うように、一定の年輪を経た樹木にはそこに神を幽観し、神の現前を感じ、大いなる生命への篤い畏敬の心情が脈々と流れている。このような日本人の無自覚と言ってもよい生き方を、我々日本人は正しく外国に伝えたであろうか。語るとしても、それを日本の特殊性として語ったのではあるまいか。それぞれ東西の頂点に立つ力士たる横綱は一体何故にしめ縄をし、神前で

の土儀入りが行われるのか、と国の内外を問わず聞かれた時に、これまであなたはなんと説明してきたのであろうか。大方は支離滅裂な説明に終始してきたことは容易に推定できる。

これらに通底するのは、人々が近代教育に毒される前は、世界に神々を感じ取り、それと共にある歓びと畏敬の念を忘れずに生活してきた、ということであり、それはまた諸外国の人々にも通底する、ごく当たり前の世界観であった、ということである。そこには《普遍》が存在する。それを忘れ去った近代の方がよほど奇形と言ってよい。

近代という生き方がいかに奇妙であるかは、土地への態度をみても良くわかる。日本では古来から、先祖伝来の土地は神そのものであるが故に、そこに家を建てる場合においても、神へのご報告とご許可を得るべく「地鎮祭」（とこしづめのまつり）をし、鎮め物をしてひたすら神への真心の表明を忘れたりしなかった。その、日本人にとっては「神そのもの」ともいべき神聖な土地を「土地ころがし」といった言葉が示すように、人間が我儘勝手に投機や金儲けの対象としてしまえば、神罰を蒙るは必死と言っても過言ではなからう。結果は、精神的荒廃となって現れていることは今日の事実が示すとおりであるが、その結果生じた途端の苦しみを受けながらも、未だそれが神罰とは悟れぬまでに日本人の感性・霊性はとことん鈍化し果ててしまったのである。

しかるに、この古来の感性は日本人の特異性なのであろうか。たとえば英語の Thing は日本語訳では「物体」という意味の「物」と訳されているが、原義は大和言葉の「モノ」と同じ意味合いを持っていた。Thing が怪奇現象を引き起こす話が、むこうにも実はあるのだ。モノへの畏怖心は普遍的な感性なのであり、ヨーロッパ人にも本来共有されているのである。日本同様、ヨーロッパに於いても、「近代合理主義」的世界観がそれを失わせたのは言うまでもあるまい。しかしながら、日本語に翻訳するときに現地での原義が失われた、と言う面も忘れてはなるまい。

この際、翻訳語の弊害についても一言触れておくべきであろう。奈良時代に「カミ」を漢字の「神」と翻訳したために大陸の神との区別があやふやになったばかりか、キリスト教がアジアに伝来したときに、西洋の「ゴッド」をゼウスと言ひ、中国語を踏まえて天主と漢訳された迄は

よかったが、明治に入ってそれをも「神」と訳されてしまったことから従来の「カミ」との重大な混乱を来たす事になってしまった。その結果、日本人は明治以来結婚は神前で誓ったものであるが、神の前であることは同じであるということ、キリスト教への回心など毫も気にもせず、抵抗無く教会での結婚式を行うようになっていく。さすがに良識のあるキリスト教団体では、回心していない者達の教会結婚式を断るようになってきてはいるが、無知な日本人の多くが海外にまで出かけて教会結婚式を行うおうとしているので、地球規模で恥が晒されている。これは明らかにゴッドを神と翻訳したことの弊害である。

また、日本語の「クニ」の本来の意味は決してステイト (state) の翻訳語としての国家というものではなかった。クニの成り立ちは土地の神霊との和睦の歴史であり、あくまで土地の神々との関係において成り立っていたはずのものである。その証拠に、明治以前の日本列島の住民の意識では、日本は国々から成り立っており、その場合の国とは国つ神の居ます所を指していた。そのそれぞれの国つ神が天照大神と和合して治まっている所、それがヤマトという国の姿であったのである。それが近代教育の枠の中で、ステイトの翻訳語としてしか教わらなくなつたために、国という言葉の本来の意味を、日本人は理解できなくなつてしまった。そこでは唐突に「個人」が出発点になっている。近代教育において「個が大切だ」などという場合における個は、目に見えない土地の神霊とつながった個ではなく、閉じた実体としての「個」が存在すると思ひ込んでいるその人の仮説的な個ではないのだ。斯様に、言葉ひとつをとってみても、この国の乱れ具合が如何に深刻であるかが分かうというものである。

《古典に見る神懸り事例》

さて、日本文化を正確に知るためには、その文化の根底に脈々と流れてやまぬ「古神道」について知らねばならず、そしてその中核には必須不可欠たる《神意窺法の法》としての「帰神（神懸り）術」があることを私たちは決して見落としてはなるまい。

わが国は神代の昔から一朝事あるときには何事においても神霊に對しご神意を伺ひ、その神意を第一としてまつりごと（政治）に誤りなきを期し

たことは、邪馬台国の女王「卑弥呼」の鬼道を持ち出すまでもなく、記紀等の古典にも明らかである。例えば第十代崇神天皇七年の大物主神の神懸りや、垂仁天皇二十五年三月条の倭大神の神懸り、仲哀天皇八年秋九月条の神懸り、神功皇后攝政前紀九年十二月条の表筒男・中筒男・底筒男三神の神懸り、顕宗天皇三年春二月及び四月条の月神・日神の神懸り、桓武天皇延暦二十四年二月条の神懸り、文徳天皇齊衡三年十二月条の大奈母知少比古奈命の神懸り、清和天皇貞観七年十二月条の浅間神の神懸り等など幾多の事例がそれを明証している。(注4)

ところが明治の御世になると神武創業の昔に習い、純粹神道に帰るべく復古神道・国家神道をめざしたものの、肝心の神靈と直接し神託を受ける尊貴ともいべき鎮魂法や婦神術の法術はスッポリ抜け落ちてしまったというか、十一兼題等に見るごとく、国学者・神道関係者らはそれが大切であると幾分は知識として分かつてはいたのであるが、最早それを實際に身を持って真に為し得る者とは一人もなく、また如何にすべきかのなすべき術さえ持たなかったのである。

《官僚という存在の功罪》

また、明治中期以降地歩を確立するようになった《文明開化主義》の政府官僚らにとつては、そうした神法・神術はむしろ不合理な邪魔なもの以外の何者でもなかったであろう。真に神意を伺うことのできる神主が存在しては、不安を目の前に突きつけられる官僚たちは、逆に一時も安心してはられないという、最も重い不快感を身に覚えざるを得ないからである。

ちなみに、古代においても、官僚たちが台頭してくると、たとえば宇佐神宮における女禰宜たちや、琉球王国におけるノロやユタなど託宣を受け得る靈的能力のある者たちへの統制がはじまるし、民間での託宣に対しては次々と禁令を発してこれを取り締まることになる。それ以前には、宇佐神宮の女禰宜たちは神靈の託宣を受けるのは当たり前のこととされ、反対に託宣を受け得なくなった時には即刻辞めさせられていたのである。このような構造はすべからず官僚層という職能集団の本能的な反応であり、この地球上におけるあらゆる地域の国家が官僚層を形成するときの一般的傾

向である。官僚層が聖なる力を独占し、皇帝のもとで世界を支配した中国の場合、徹底的に靈的能力を持った者達を排除しようとし、撲滅を計っている。儒教官僚の書である『水系注』などをみると、いかに彼らが巫げきを敵視しその撲滅を謀ったかが、良くわかるであろう。その結果中国では土地神への信仰が失われ、ヨーロッパとは別タイプではあるが、人間主義的物質合理主義が跋扈するようになってしまった。これは官僚支配の根本的問題点である。その根本は、官僚層が自分たちの本来持つべき「実存的不安」から、組織的に逃避していることに起因している。それが伝統的な言語体系として盤石の文化構造体に進化したものが、実は儒教である。

この影響は日本でも古代以来存在してきたが、とくに江戸期以降大きな力を発揮し、日本人に人間中心主義の合理主義を植え付けてきた。それは行法への軽視や託宣の国政からの排除を結果し、神靈の存在を無視する傾向を生みだしていた。それは実に国学にすら色濃く現れていたのである。日本の危機は幕末・明治期以前に、すでに胚胎していたのだ。

戦後の困難な時期、神道界の論客として斯界をリードした葦津彦氏はその著『神國の民の心』において本居宣長ら国学者たちを批判して、次のように述べている。

なぜかれらは、「大地の動きは神の知るところであるから神に聴くべきだ。正しき道は、神々の命に忠であるべきだから、神の意は、神から聴くべきだ」と答へなかつたのであらうか。(中略)かれらが断固として然う答へ得なかつたのは、神懸りを古代人のこととしては肯定したらしくも見えるが、「自分等の今の時代には正しい神懸りなどはありえない」との世俗合理主義者に近づいてしまつてゐるからではないか。古典によれば、古代人は禊祓によって、身を浄め、鎮魂につとめ、神々に接して、神意をきくのにつとめたものではなかつたか。それが古神道の根幹なのではなかつたか。しかし、真淵も宣長も、一度も神懸りによって神命を聞いたことがなかつた。(注5)

つまり国学者たちは宣長以来「神懸りなどは無視してをり、自ら神懸りすることに、つとめなかつたのみではなく、神懸りの靈力ある人物をもとめようとしなかつた」のである。

天平期以前の古代の神道では、事に応じ時に臨んで託宣の場において神

を祈り、神を乞い求めて、結果、権威ある高位の神々の神懸りによる正鵠を得た神教が得られ、それによって大事が決定されていた。しかるにその慣行は奈良・平安時代にはすでに衰微に向かつており、近世の神道にはそれがまったく見られなくなってしまい、今日すでに古神道の本質は滅び去り形骸化してしまっただのだ……との葦津翁の指摘は、今日の神道界の現状を厳しく突いていると言える。

神仕えする神職そのものが真神を知らず、見えざる神霊への真摯な畏敬の心も持たずして、神道を口にし、どこの新興宗教団体の本とも変り映えのしない、まるでつづり方程度の中身の無いカルチャーセンター的神道書ばかりが流行る時代である。これらは詐欺以外の何者でもなからう。神道は知識ではなく、いかに本を読んだからとて分かるものでもなく、また、分かったものが説いているわけでもない、ということを私たちはよくよく知らねばならないのである（これからの時代はニセモノではなく本物こそが求められるのである。ケルケゴールが「実存」を重んじたのはまさにそこにあるのだ）。こうした状況は今日、神道界・仏教界その他の聖なるものに仕える所謂聖職者全体に共通して見られるものであり、聖職者たちがそうであるなら他は推して知るべし……である。

五 日本精神文化の根底にあるもの 古典に見える託宣

託宣の「託」字は日本最古の漢和辞書である『新撰字鏡』によれば「伊乃留。又久留比毛乃伊不。又口波志留。」とあり、即ち「祈る。また、狂い物言ふ。また、口走る」との意であるというのである。（注6）

森田康之助博士はこの『新撰字鏡』をもとに、「神を祈る」と「神に祈る」のその違いについて次のように述べておられる。

祈ることによって、神霊は活動を開始するのである。その活動が「狂ひて物いふ」とか「口ばしる」として把握されているのであって、狂って物いったり口ばしるということは、神霊や精霊が人に憑依して自己の意志や思考を表明して人に伝えている状態を指しているのである。であるから、神を祈るといふことは、神の意志や思考を表明して人に伝えていく状態をさしているのである。であるから神を祈るといふことは、神の意志や思考を實際にその眼で見、その耳で聞いて確認しよ

うとすることであって、今日われわれが神に祈って拝礼したとしても、実際に神の意志や思考を確かめることができず、おそらくはたぶん聞き届けてくださるのだらうと自ら慰めるのとは、ここに大きな差違のあるのを、見てとらねばならぬと思うのである。（注7）

単に助詞「を」と「に」の一字の違いなのであるが、「神を祈る」という場合には神霊の降臨を乞うということ、姿なき神霊の顕れましますのをひたすらに願うということであるが、「神に祈る」の場合には対象的・具象的に既にそこに坐ます神に祈ることになり、神とは「我に對する汝」というように人に相対して存在する……という考えとなり、両者のその意味内容は大いに相違する、と森田博士は云われるのである。仏教渡来以降、神の社殿が営まれるようになって以後、神はいつも社殿に鎮座されているのだと考えられるようになったというのであり、これはそれ以前とは異なって新しい考え方というべきであり、ここに神霊と人との関係に大きな変化が生じたといふべきであらう。万葉集には「神を祈る」とはあっても、「神に祈る」という例は見出せないからである。

神懸りによって神霊の託宣を乞う宗教的儀礼の背景には、『世界の実存的開示』という状況が存在する。素人がたまたまこれに修行もなく万が一にも不用意に直に触れるとすれば、恐らく発狂するか死んでしまうかもしれない。「託宣」とは実存的世界の開示の場面に出会うことを指しており、これは極めて危険なのだということを知っておいて欲しい。従って、実際には神霊は人を選んで現れるものなのであり、何よりも自らの真正なあり方を見分ける力を持つ仲介の人（メディア）を通して、神霊の意向を伝えようという人に立ち頭れてくる。

その人自身はそれが真正のものであるかどうか判断がつかかねる事がある。それを判断する立場の人を「審神者（さには）」と呼ぶ。幕末から昭和期にかけて起こった民間宗教の世界においてさえ、例えば天理教の中山みき女や大本教（現、大本）の出口ナヲ女のように当初、己に憑依した霊物が何者なのか、果たして狐か狸か神か、神ならば正神であるのか邪神であるのか、優れた審神者無きためにその判別に苦慮したことが知られている。出口ナヲ女は自分に憑依した霊物の正体を知ろうとして、天理教や金光教の教会などを訪ねている。自分の身に起こったことについて知ろうと

して、如何に真剣に悩み抜き且つ混乱状態にあったかが分かる。常に人は良き師を求めねばならない。何よりも疑ってかからねばならないのは、例えば優れた師を持たずに滝場などで修行している内に何らかの憑きものがあった時に、それが果たして真正な神霊か、妖魅・邪霊の類かその判断もつかないのに、勝手に神仏の言葉と称して、その憑き物のことを語ることであり、それは悲惨な結果しかもたらさない。

さて、古典を真面目に研究した者ならば、神道にとって「神懸り」が如何に重要かつ不可欠のものであるかが分かる筈であるのに、賀茂真淵や本居宣長など国学者らが古訓の解釈のみに終始して肝腎の神懸りに対しては手も足も出なかつたのは、すでに彼らが人間主義の合理主義に侵されていだからだ：と葦津翁は重大な指摘をされた。神道の真髄は国学者らのように単に理による解釈では到底分かり得ず、身自ら行法を實踐して神霊に直接する道を体験・体得する以外にないのである。だが実は葦津翁よりもずっと以前に同様の指摘をしている者がいた。幕末・明治の優れた神典学者であり、また靈学中興の祖として、神道行法の達人として宗教集団（大本教・三五教ほか）や神道界はじめ、その道を志す者に今日においても少なからず影響を及ぼしている本田親徳翁（薩摩藩士。通称九郎。文政五年正月十三日、鹿児島県川辺郡加世田郷武田村生まれ）その人である。彼はその著『難古事記』に次のように述べている。

此の神懸りのこと本居平田を始め名だたる先生達も明らめ得られざりし故に、古事記伝、古史伝ともに其の説々皆誤れり。親徳拾八歳皇史を拜読し、此の神法の今時に廃絶したるを慨歎し、岩窟に求め草庵に尋ね、終に三拾五歳にして神懸三十六法あることを覚悟り、夫れより幽冥に正し現事に徴し、古事記日本紀の真奥を知り、古先達の説々悉く皆謬解たるを知り弁へたりき。（注8）

幽冥に正し、神霊の教えを受けなければ『古事記』や『日本書紀』の深奥は決して分かるものではない……と本田親徳翁は言うのである。残念ながら、本田翁が古典を元にして生涯賭けて苦心の末に再興したところの神霊と直接し神教を受けるためのすぐれた皇法と靈学（鎮魂法・帰神術）は今日、神社界では全く知られていないというか、無視されているというのが現状である。

古神道行法を身を持って実践し、真にその奥の堂に入るためには、すべてを投げ打って徹底して神界への奉仕者たらんとする覚悟はもとよりの事、専心何十年という長期の（生涯をかけての）積み重ねの修行と、「靈学は浄心を以てもととなす」と言われる如く、世俗の名利等一切に囚われない徹底した「浄心」の持ち主でなければならぬ。神界に己が真心を捧げ且つ認めて頂くためにはこうしたことが必須の条件であるために、並みの者では到底勤まらず、従って誰もが何もなし得ずに終ってしまう。また、例え志を持って励む者であってもそのほとんどが生不安に耐えかねて大抵は途中で棒折れしてしまうか、あせりが災いして妖魅界（魔物の餌食）に魅せられて入ってしまい、しかも本人はそれにまったく気付かず、死んでみ始めて気がつく……といった悲惨な目に遭うことになる。それほど厳しい道であるために、だれもが最初からあきらめてしまっており、また己れの至らなさ・無力さを直視するのは耐えがたいために、こうした修行にはまったく触れないか無視する態度をとることによって己の立場を守ろうとする者が殆んどと言ってよい状況なのである。

そういったわけで今日、神霊から直接の神誥・神教を受けるための「神懸り」など神職にとって不可能なのが当たり前……といった神社界の風潮なのであるが、これはやはり今後改めていかなければならないのではなからうか。

《仲哀・神功皇后記に見る神懸り》

さて、古代においてこの神懸り（世間にある「靈憑り」とは一線を劃しハッキリ区別すべきである）は一体どのような行われたのか、「神霊が依り憑き託宣を發する」という、そこには一体どういうルールが見られるのかを、古典の中から一事例を参考に引用しながら簡単に見てみよう。前項で古代には幾多の神懸りが行われたことを知るために、『古事記』や『日本書紀』の中から八例ほどその事例を示しておいたが、その中からここでは記紀の仲哀天皇紀・神功皇后紀における帰神（神懸り）事例について考察する。

『古事記』中巻、神功皇后の新羅征討の条には以下のような記述がある。

其の大后息長帯日賣命は、當時神を帰よせたまひき。故、天皇筑紫の

訶志比宮に坐しまして、熊曾國を撃たむとしまひし時、天皇御琴を控かして、建内宿禰大臣沙庭に居て、神の命を請ひき。是に大后神を帰せたまひて、言教へ覺し詔りたまひしく、「西の方に國有り。金銀を本と為て、目の炎耀く種種の珍しき寶、多に其の國に在り。吾今其の國を帰せ賜はむ。」とのりたまひき。爾に天皇答へて白したまひしく、「高き地に登りて西の方を見れば、國土は見えず。唯大海のみ有り。」とのりたまひて、詐を為す神と謂ひて、御琴を押し退けて控きたまはず、黙して坐しき。爾に其の神、大く忿りて詔りたまひしく、「凡そ茲の天の下は、汝の知らすべき國に非ず。汝は一道に向ひたまへ。」とのりたまひき。是に建内宿禰大臣白しけらく、「恐し、我が天皇、猶其の大御琴阿蘇婆勢。」とまをしき。爾に稍に其の御琴を取り依せて、那麻那麻邇控き坐しき。故、幾久もあらずて、御琴の音聞えざりき。即ち火を舉げて見れば、既に崩りたまひぬ。爾に驚き懼ちて、殯宮に坐せて、更に國の大奴佐を取りて、生剝、逆剝、阿離、溝埋、糞戸、上通下通婚、馬婚、牛婚、鶏婚の罪の種類求きて、國の大祓を為て、亦建内宿禰沙庭に居て、神の命を請ひき。是に教へ覺したまふ状、具さに先の日の如くにして、「凡そ此の國は、汝命の御腹に坐す御子の知らさむ國なり。」とさとしたまひき。爾に建内宿禰、「恐し、我が大神、其の神の腹に坐す御子は、何れの御子ぞや。」と白せば、「男子ぞ。」と答へて詔りたまひき。爾に具さに請ひけらく、「今如此言教へたまふ大神は、其の御名を知らまく欲し。」とこへば、即ち答へて詔りたまひしく、「是は天照大神の御心ぞ。亦底筒男、中筒男、上筒男の三柱の大神ぞ。今寔に其の國を求めむと思はさば、天神地祇、亦山神及河海の諸の神に、悉に幣帛を奉り、我が御魂を船の上に坐せて、真木の灰を瓢に納れ、亦箸及比羅傳を多に作りて、皆皆大海に散らし浮かべて度りますべし。」とのりたまひき。(以下略)(注9)

記紀などの古典に依れば、古代には戦さや天変地異、疫病、天皇・国家の一大事：などの際には求めずしての神懸りや、人間の側から求めての神懸り式が行われ、神霊の神教を乞うたことが知られるが、此処に取り上げた事例は後者の場合の例である。即ち、熊曾や新羅の征討に際して筑紫の訶志比の宮(現、香椎宮)において神霊の神教を乞うために天皇自ら神懸

りの式を執り行ったのである。

仲哀天皇が自ら御琴を弾き、神霊が依り憑くメディア(「依り代」としての神主には神功皇后が、沙庭(『日本書紀』では「審神者」と表記)には建内宿禰大臣が預かった。つまり、訶志比の宮で行われた神霊の託宣を得るための神懸り式は、三者構成で、深夜神庭において厳密に行われたのである。

・御琴を弾く「琴師」の役(仲哀天皇)

・神霊が依り憑く「神主」の役(神功皇后)

・沙庭に居て神霊の正邪を判ずる「審神者」の役(建内宿禰大臣)

神懸り(託宣)式が夜になって斎行されたことは御琴の音が聞こえなくなったので「火を舉げて見れば」と記されていることと分かる。

また、沙庭に伺候する建内宿禰大臣の「審神者の役」は折口信夫の言うような単に神語を通訳する役などといった安易なものではなく、神霊の正邪真偽を判ずる重要なお役であったことは、神主に憑ってきた神霊に対して天皇は「偽りを為す神」であると疑われたこと、またそれに対して大臣は「恐し、我が天皇、猶其の大御琴阿蘇婆勢。」と進言していることでも分かる。もしも、天皇が疑われた通りに、神主に憑ってきた神霊がまさしく偽神(邪神)であったなら、大臣の進言は国家的大事に際して大変な重罪を犯したことになるし、また、天皇が崩御されることも決して無かったに相違ないからである。神霊の託宣を得るための真正の神懸り式というもの、天皇であっても本来このように生命がけの厳しいものであったのである。

《審神者の職掌》

古代においても不可視の神霊には正神もおられれば邪神もいるのだということは十分に知悉していたし、また、そのためにそれを見極め判別するための重要かつ不可欠な「審神者」という役を置いていたという点はよくよく考えておくべきことではなからうか。

古典には身体的可視的現象として記述されているけれども、神霊と人間との本質構造がここには示されているのである。正しい神霊との出会いは決して生易しいものではなく、それを正しく見抜く目を持った霊的達人こ

そが神靈との出会いを可能にする。その導きを受けた時、世界が幸魂・奇魂あるいは荒魂・和魂の恩恵に浴する。記紀の世界はその達人として建内宿禰大臣という天才を書き残そうとしたのである。

審神者の役は神靈によく通ずる者にして且つ神界から認められた者でなくしては決して叶わぬものであって、単に人間の側からの熱意や努力のみでは如何とも為し難く、従って誰でもが為し得るものでは断じてないということを知らねばならない。また、靈学の道は修行者となる特定の神靈との血統ならぬ「靈統」というものが非常に重要不可欠になってくるのであり、これが修行に大いに関係するということも述べておかねばならない。本田親徳翁の高弟であった月見里神社の長沢雄楯は審神者について次のように述べている。

審神者たるには神典学を首とし、内外の歴史・地理より、天体・地質・物理・化学・宗教・哲学・文学等百科の学に通ぜざれば、真神と偽神との弁別は為し得る者にあらず。(中略) 審神者は宏才博識の士にあざれば能はざるは茲に存せり。(注10)

つまり、行・学ともに備わった高潔の人士にあらざれば審神者の御役は到底務まらぬのであり、本論で述べている審神者というものは巷にある、いわゆる問答審神者などと称する者らとは全く似て非なるものであって、それらとは到底較ぶべくもないのである。

記紀ともにこの仲哀・神功皇后紀の託宣の式の内容はほぼ同旨であるが、天皇崩御後の二度目の託宣の式においても審神者(二回目は中臣烏賊津使臣)を置いていると言うことは、当時如何に審神者の御役が重視されていたかが分かるうと言うものである。

この審神者が古典から消えて行く過程で儒教や仏教が隆盛を見ており、本田翁が命懸けで靈学を再興し、審神者の法を確立したのも、儒教・仏教の持っている危険性を読み解いていたからなのである。

さて、神主に憑った神靈(正神)は「皇后の御腹に坐す御子が此の国を治める」と宣し、また皇后の御腹の内なる子は「男子ぞ」と正しく見通しておられる。この御子は後の応神天皇であり、憑神は住吉の三神(底筒男・中筒男・上筒男三柱の神)であって、しかも天照大神の御心であると告げている。天皇ご自身が齋行される託宣(神懸り)の式であるからこそ、ま

た、一点の私心無き国家的大事に関する問題であるからこそ、その祖神たる天照大神の御心が顕れて重大な神教を賜ることが出来たのであることを見落としてはならない。つまり、如何に望外のことを願っても、修行者自身の魂の高き低き、清き卑しき…の程度に相応したレベルの靈しか憑らない…というのが神律(幽冥界の法則)なのであり、低い靈魂を持つものが高位の神靈に通ずることは如何に望んでも断じて出来ないのだということを知らねばならない。

本田翁は「神傳秘書」の中で靈学を学ぶ者が常に服膺すべき諸注意として七項目を挙げているが、その七番目に次のように記している。

精神正しければ即ち正神に感合し、邪なれば即ち邪神に感合す。精神の正邪・賢愚は直に幽冥に応ず。最も戒慎すべし。(注11)

従って世間がありがちな、単に金が儲かるかとか、株の値が上がるかとか、どの宝くじが当たるか…などといった私的な事柄に対して、必要もないのに真の神靈が応答して何事か託宣するなどといったことは断じて無いのである。世間で横行している宗教団体の神や佛や靈能者などと称する者らはそのほとんどがつまらない妖魅・邪霊の類やニセ靈能者たちなのであり、そんなものにだまされて己の尊い神授の靈魂を穢されないようにくれぐれも気をつけるべきである。真の神靈は決して組織や教団などをお望みにはならないのだ、ということをしッカリ肝に銘じていてほしい。本田親徳翁が印可の印として弟子に与えた「神傳秘書」中において正神界に百八十一階級があり、邪神界にも百八十一階級あり、と記している。そして各々僅か一段異なるだけでもその下からは雲を掴むようなものであり、自分の界から上級界は全く見えない…というのが神律(神界の法則)なのである。分かりやすく例えて言うならば、この俗世においても教師でも医者でも弁護士でも良き悪き各々ピンからキリまで居ると言うことである。真神(正神界の神靈)は決して自ら人間に手を差し伸べてくることはないが、神仙道的なものや、下等なものは必ず彼等(妖魅・邪霊)の方から先に行動を起こして、人に寄り憑き、奇跡を行い、人を驚かせ、まったく神律を無視する輩どもなのである。

こうして古典を紐解いて見ていくにつけ、ただ視聴率を稼ぐだけのために審神者も置かず、見えない存在の言うことなら何でもかんでも鵜呑みに

信じ込む霊的知識のない視聴者たちをだまして、正邪の判別すらつけられない無知な低級霊能者を担ぎ出して大衆を煽る……といった今日のマスコミ放送界が与える弊害が如何に甚大であるか、且つその罪の大きさが分かる。邪霊に憑かれていても分からない宗教団体の教祖や偽霊能者らのいかがわしい霊言や低級極まりない憑霊現象などといったものが商品化されてしまいい、すべてがビジネスベースで動いているという現実が即刻改めなければならぬのではなからうか。

話が横道に逸れたが、なお留意すべきは、神主である神功皇后に寄り憑いた神霊に対して、天皇は葦原中国の統治者として対峙しているという点である。間違つてはならないのは、天皇ご自身が直接神懸りすることはないということである。まつりごとの執行者である天皇自身に神霊が依り憑いては、一体誰が神霊と対峙して国家の命運を賭けた神教(託宣)を誤りなく受け得るといふのか。神霊との直接体験のない者らの素人解釈、たとえ正邪を問わず民間伝承はすべて正しいとばかりに何でも無批判に受け入れてしまふ、従来の民族学者や人類学者、宗教学者らのシャーマニズム論や行法論など何の役にも立たないということを知るべきである。

六、おわりに、「修行」の本質

これまで、真の神霊と直接託宣を受けるための修行には優れた師(審神者)が必要不可欠であること、天性の特別の資質の上に「浄心と専修」つまり純粹な心(清浄心)を死生を越えて保持し、何がなんでも貫徹せざれば止まずとの熱意・覚悟、限らない積み重ね・努力が大切であることについて述べてきた。

私たちの精神活動のひとつに言霊(ことたま)——ことばを通して世界と交通する——ということがある。言葉が発することによって、我々の精神分野から果してことばが抜け落ち、減っていくだろうか。全く逆に、よりすぐれた言葉を発することによって、その人の精神がいよいよ高まり充実するのである。それは一個人に止まらず、周囲を、さらに世界を充実させる。発するということが実は大いなる充実につながる。一にして多、霊魂と言うのは本来、そういう構造を持っているのであり、これを実存哲学では世界・内・存在と構造化して描こうとしたのである。神霊と言う大い

なる問題を扱うときに低レベルの実体論・機械論を用いることは危険極まりないと言ふことを身に徹するべきではないのか。そういった意味で現在のシャーマニズム論はあまりにもお粗末である。

さて、前項で紹介した本田親徳翁が再興した霊学(鎮魂法・帰神術)の内、鎮魂行法について簡単に述べてみよう。鎮魂は真心を練る法である。この行法では前もって審神者から神霊(天宇受賣大神の分霊)を鎮めてもらった鎮魂石を、大いなる他との邂逅を果すためのメディアとして用いる。静寂な部屋でこの鎮魂石と一メートルほど離れて対峙し、「吾が霊魂は鎮魂石に鎮まる」と四〇五回強く思念して後はひたすら統一して無の境地を保持する……という、言葉で表現すればたったこれだけのことなのである。本当の神霊に出会い交流するということは物凄い事だということをお田翁は知っていた。

そのためには自分の内部を無限に充実させなければならない。世俗的な一切を捨て去り、あるいは抜け出て、真の純一無雑なというか、「無の境地」(奇魂の働きのより、自己の直霊が霊肉分離し神界に到った状)に到らずしては、鎮魂石に吾が魂を鎮めることは出来ないのである。「無」は一切の道の極地である)。鎮魂石を通して大いなる神霊と邂逅すること、それは実は本来の自己が開示されることでもあるのだ。それ故に自ら充実できるのである。

鎮魂を生まず弛まず積み重ねていくうちに、自己の霊質の密度が高まり向上して真魂の働きが強くなり、総合されて鎮魂力、即ち神霊に通ずる力がついてくる。そうなってくると、鎮魂石に向かうと上方から靈光(神霊の光)が降り、頭上にさんさんと降り注ぐのを感じることができるようになり、鎮魂石に鎮まる神霊の導きによって霊肉分離して自己の直霊が神界に入るのがハッキリ自得されるようになるのである(真の神霊の神気というものは筆舌に尽くし難い)。

大切なことはそれからなのである。霊肉分離といっても完全な霊肉分離に到るまでには無数の深淺、種々の段階があるからである。参考までに霊学の兄弟子であった某氏との書簡集の中から彼が戦前、霊学を志す以前に体験したある霊肉分離の例を挙げておこう(この例は神社の御眷属神霊に通じたもの)。

特別の祈願などはなかったが或る年の秋の終わり頃、向島にある白鬚神社の宮司にお断りして百日間の行を開始した。その頃は蚊も多く、顔や首、手、足をさんざん喰われてひどい目に遭いながらも、飽くこと無く続けた。九十七〜九十八日目になって、神前で祝詞を奏上し始めた瞬間に、全身に電気がかかったようになり、声も出ず、身体がしびれ、感覚が無くなり、瞬時に自分の魂が空中に登り、立派な社殿の前に立ち、その御扉がギィーと開いたと認められた時、初めて我に返りました。ほんの僅かの間のことでしょうが、「このまま終わる」という恐怖と共に、なんとも言えぬ清らかさを味わい、今に至るもその時の気持ちと言うものは忘れられません。その後、百日が終わると三日、昔は此処が土手になっており、此処へ差し掛かる時になると身体が何丈もの高さになり、側の大倉の屋敷（二階建て）の上に乗って、この屋根が見えるのです（以下略）。（注12）

鎮魂石なしには内部論理だけでは決して充実しない。言葉ですら、優れた知性を外に表わさないと自らの優れた精神を生み出すことはない。外に自らを充実させないことには自己の内部の充実もない（禅はその時点で留まっている）。その修行を為し得た人だけが幽冥に通じ、神霊と初めて出会い、交流して神教を受けることが出来、霊肉分離して外から自分自身を見、また他者の身体を隈なく霊視して病気の箇所を見たり、あるいは他者の魂をも自由に見得る人になるのである（霊肉分離したからといって決して肉体人間が空っぽになるわけではなく、大いなる充実があるのであり、こうした点はただ外部の現象を見たまま聞いたまま類型化するのみのシャーマニズム論では絶対に分らない）。かくして世界（ここで言う世界とは単なる意識表象としての世界ではなく、言い換えれば「存在」そのもの）と真に向き合ってこそ初めて「私」というものが全体として開示されるのであり、これこそが真の意味での「自己の確立」なのである（そういう意味で戦後教育は自己破壊教育以外の何者でもないのである）。

これを抜きにして、人がもし万一にも神霊に出遭った時には、発狂するか死ぬしかないという厳粛なものを語っている。ただ、修行を積んだ者には、それが真の安穩の世界としてその世界を受け入れることが出来るのであり、このことを理解しないで誰でもが簡単に神霊の威徳に預かれるとい

うような語りをする者に対しては、まったくニセモノだと思って間違いない。優れた宗教者たちはそのことを深く受け止めて気付いており、簡単なものだと神霊について語ることは決してないのである。以上

【註】

- (1) J.Rawls "A Theory of Justice" 1971. Cambridge Press. 矢島鈞次監訳『正義論』（紀伊国屋書店・一九七九年）
- (2) M.Heidegger "Sein und Zeit" 1927. G・スタイナー『ハイデガー』（生松敬三訳、岩波書店、一九九三年十二月）五三〜二三〇頁。原佑『ハイデッガー』（勁草書房、一九六三年三月）。吉本浩和『ハイデガーと現代の思惟の根本問題』（晃洋書房、二〇〇一年三月）参照
- (3) S.A.Kierkegaard "Sydommen til Døden" 1849.
『死にいたる病』（キルケゴール著作集）十一、松浪信三郎訳、白水社、一九六五年一月）十四〜十七頁。「死にいたる病」はこの病は死に至らず」（ヨハネ伝十一）と告げたキリストのことばから出ている。
- (4) 拙著『古神道の秘儀・鎮魂と帰神のメカニズム』、「古代の帰神（神懸り）」（海鳥社、平成五年三月）二五〇〜二六七頁を参照されたい。
- (5) 葦津珍彦「古神道と近世国学神道」（『神国の民の心』、島津書房、昭和六十一年九月）二七七〜二八頁。
- (6) 「新撰字鏡」（『群書類従』第二八輯、雑部、統群書類従完成會、昭和五十七年十月）二九六頁。九世紀末の寛平・昌泰年間に撰られた、漢字の訓義を示した最古の字書である。
- (7) 森田康之助『日本の神話・原像と発展』（原書房、昭和四十七年九月）二六〜二九頁。
- (8) 本田親徳『難古事記』（『本田親徳全集』、山雅房、昭和五十一年六月）二二四頁。
- (9) 倉野憲司校注『古事記祝詞』（日本古典文学大系1、岩波書店、昭和六十一年）二二九〜二三二頁。
- (10) 拙著『前掲書』二四三頁。
- (11) 拙著『前掲書』二八〇頁。
- (12) 霊学の師「佐藤隆」氏の門下であった筆者の兄弟子に当たる、故大

久保藤男氏との数年にわたる靈学に関する書簡集より一部抜粋したものである。